

「いなかたち」考

——「虫めづる姫君」の難語の解釈——

はじめに

『堤中納言物語』の「虫めづる姫君」という短編の物語は、内容がその当時においても奇妙で風変わりであるので、その内容は物語の中でもよく知られたものである。その物語の中で、作品の主題に沿いながら、現在でも解決されていない言葉がある。そしてそれは、主人公の姫君の考えを述べた部分でもある。原文を引こう。

童べの名は、例のやうなるはわびしくて、虫の名をなむ、付けたまひける。

螻蛄男、ひくさ磨、いなかだち、蝗磨、雨彦なん、名と付けて召し使ひたまひける。^{〔1〕}

つまり、召使いの男童たちに、虫の名前を付けて呼んでいる中の一つに「いなかだち（いなかたち）」があり、何の虫で、どのような形に名付けたか、わからないのである。

この部分について、山岸徳平は「諸本はすべて『いなかだち』

櫻井靖久

とある^②』といい、藤森明夫・佐伯梅友は「『いなかだち』は」諸本にこうあるが、これではわからない^③』という。更に山岸は、源氏物語の夢の浮橋巻の諸本の異同の例をあげて、「いなかだち」は粗雑な書写と連続書写による書き誤り、見誤りの結果の誤写であり、本文を「因って今は『かなかち』と、改め正した^④』とする。

私自身にこの誤写説の当否を判断する根拠と能力を持つてはいない。それ故、ここではその結果出てきた結論の「かなかがち」について検討する。

一、「かなかがち」説は成り立つか

本文誤写説の「かなかがち」をとりあげると、本文はこうなる。今、虫の名をカタカナに、語尾を漢字で書き改める。

「ケラ男、ヒクサ磨、カナカガチ、イナゴ磨、アマ彦なん、名とつけて召し使ひたまひける」となる。雨彦^{あまひこ}は、雨彦そのもので一語であるが、今は措く。五人の男童に対し、五つの名前、そし

て四人についてはいずれも、接尾語に男を表す「男^お、麿^{まろ}、彦^{ひこ}」が付いている。その中において「カナカガチ」は異質である。これについて山岸は説明する。

かなかがち 「かなへび」のこと。「かがち」は「かゞし」とも言ひ、「へび」である。これは長い名なので、「まろ」とも「を」とも付けない。(中略)「かなへび」に昆虫を食わせて飼育する者もあつたらしい。

「かなへび」については、地方の方言例をあげ、図を掲げているけれども、接尾辞をつけない理由としては、「長い名」であるというのみで簡単にすませている。

それだけのことであろうか、という疑問が出てくる。他の虫に関する語ならともかく、問題になっている言葉のみ、接尾辞が欠けているというのであるから、簡単に見過ごすことはできない。もつとはつきり言えば、接尾辞をつけている語群とつけていない語群では「ことばの位相」が違つてくると考える。

他の作品の例をあげる。まず、『徒然草』の第一二四段を見る。

この高名のさい王丸は、太秦殿の男料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人はひざさち、一人はこ

とづち、一人はふばら、一人はおとうしとつけられけり。

この場合、太秦殿は養牛の家柄なので、女房名を「膝幸^{ひざさち}」「特^{こと}槌^{づち}」「抱腹^{おふく}」「乙牛^{おづ}」と牛の種類や部位等の牛の縁語でまづめてい

る。

次に『今鏡』の「二一〇蜂飼^{はちかい}の大臣宗輔^{おとど}」をあげる。
蜂といひて人さす虫をなむ好み飼ひ給ひける。(中略)足高^{あしたか}、
角短^{かくみじか}、羽斑^{はねまだら}なんといふ名つけて呼ばれければ(以下略)

とあり、同じ話を『十訓抄』でこのようにあげている。

京極太政大臣宗輔公は、蜂をいくらともなく飼ひ給ひて、「なに丸」「か丸」と名を付けて、呼び給ひければ、召しにしたがひて、恪勤者などを勘当し給ひけるには、「なに丸^{なにがし}、某刺^{なり}して来^き」とのたまひければ、そのままにぞ振舞ひける。

『徒然草』の女房名、宗輔の『今鏡』に見る蜂の名、『十訓抄』の用例は、それぞれの場面の中できちんと型として整い、意外性もなく乱調でもなく納まつている。

そして改めて、姫君の名付けた五人の男童の名を並べてみると、「かなかがち」のみ落着きが悪く、突出している。虫の名であることは確かであるが、童名、もつと言えば人間の名らしくない。長い名であるとするならば、縮めても通用する「かがち麿^{まろ}」とか「かがち彦^{ひこ}」と略して接尾辞をつけた方が、男童の名称として、他の四人の中にきちんと納まる。私は誤写説の結果として出た「かなかがち」という説は、姫君の男童の名称としてふさわしくないと判断する。

また、『医心方』の「蜻蛉^{せいてい}」に「カタチ」と訓釈があるので、「いなかたち」を「稲蜻蛉」とする説もあるが、私としては「かなかがち」と同様の理由でとらない。他の四人の男童の名称に比べて異質であることに変わりないからである。

それでは、「いなかたち」とはどのような言葉であり、意味を持つものなのか、章を改めて考えてみる。

二、「いなかたち」の考え方

まず最初に問題とする語句を「いなかたち」の標記とすることにする。前掲の山岸の「諸本はすべて『いなかたち』とある」に従う。だからここでは「いなかたち」あるいは「いなかだち」の語句を問題にする。

次に他の四つの言葉にならない、男童にふさわしく「男」もしくは「人」をあらわす接尾辞をもつことを考慮する。「男、麿、彦」がそれにあたる。ただし、「男」と限定されたのはたまたまの傾向であるかもしれない。例えば「麿」については『岩波古語辞典』では、

奈良時代には多く男子の名に用いた語。平安時代には広く男女にわたって自称の語として使われ、親愛の情のこめられた表現であった。室町時代、転じてマルとなり、接尾語となつた

とある。現代の女性名の接尾辞である「子」についても、同辞典で「小野妹子」の例をあげて、

愛称の気持で人名の末につける。平安朝以後は貴人の女に多く使う

と説明する。

ここで求めるのは、「人」に対する接尾辞で、少なくとも「男童」についておかしくないものとする。

次に「虫の名前」である。「けら」「ひくさ（ひき・ひきがえる）」「いなご」「あまびこ（やすで）」は、当時の日常生活で見聞され

使われていた虫の呼び名であると想定される。それ故に「いなかたち」にしても、他の四つの虫の名前にしても同じ次元で理解されるものと考えられる。より正確な形で言えば、『堤中納言物語』の作者も理解し、作中の「虫めづる姫君」も理解し、そしてこの作品を読む同時代の読者にも周知なものであると考えられる。

そうすると、これらの虫類（もちろん現代の生物学の分類とは違う）の知識はどのようなものであり、どこまで広がり、どのようにまとまった知識なのであろうか。私はそれを『和名類聚抄』の世界であると考ええる。この中には、四つの虫に加えて「やまかち」という「蛇」も含まれている。それ故に、「いなかたち」もこの「虫（蟲多）部」の部立の中に含まれており、そこを出ないと考える。

例えば、この『和名類聚抄』の世界では、「鳥（羽族）」は「虫部」とは別の部立になっている。極端な比較の例として「鳳蝶（アゲハチョウ）」は虫の部で、「鳳凰」は鳥の部である。直接に「いなかたち」という表現の呼び名に対応するものは見当たらない。しかし、その実体をさし示すものは、この中にあると私は考えている。

三、接尾辞から考える

「虫めづる姫君」の男童名である「いなかたち」という語句は、少なくとも前半と後半の二つに分かれることが予想される。

三つ以上の可能性もあるが、まず二つを考える。即ち「前半（虫

の名前) + 後半(男あるいは人の接尾辞^{ブラス})」である。

語構成としては「いーなかつち」「いなかかつち」「いなかーち」「いなかたーち」の四種類となる。可能性としては、同音の続くことにより一方が脱落する場合があるので、「いなかーち」「いなかーかつち」「いなかたーち」「いなかたーち」も考慮しておく。

前半の構成部分にあたる虫の名前の同定が本筋であるので、脇を固める意味で、接頭語と接尾語の用例の可能性を最初に考える。

まず「いーなかつち」と「いなかたーち」である。結果としては残念ながら、「い」が「虫類を意味する語句、接頭辞」と「ち」が「男あるいは人を意味する接尾辞」については、各種辞典では検索出来なかった。一般的な語構成においても、五文字の場合に「一一四」「四一一」の組み合わせは少ないと考えられる。

残る接尾辞の可能性は、「ーかつち」と「ーち」である。

まず「かつち」については『日本国語大辞典』によれば、漢字を「形容」とし「物体が平面または空間に占められている有様」ということで、この場合の意味を考えると、「人の容貌や姿態」「美しい顔だち」となる。特に接尾語的な意味はないし、男や人を表わすわけではない。また、先にあげた「昆虫」とんぼ(蜻蛉)の異名も、別の項目として揚げられている。ここでは比較のために例を上げるとし、結論を保留する。

次に「ち」を見る。同辞典には「達・等」の漢字に接尾語として説明する。

①人を表す名詞・代名詞に付いて、複数を表わす。また、そのすべてのものを含む意も表わす。上代では、神・天皇・高貴な人に限られたが、時代が下がるにつれて範囲が拡大し、

丁寧な表現として用いられるようになった。「ども」「ら」に比べて敬意が強い。②複数の意が薄れ、軽い敬意を表わす。

③(「だち」とも)敬意を失って、目下の者、一人称の代名詞、また擬人化して動物などにも用いる。

今、「いなかち」の「ーち」として必要とする説明を、『日本国語大辞典』の「ち」の説明の中に全て含まれている、と考える。つまり、「接尾語」であり、「人(この場合には虫)」を表わす名詞・代名詞に付いて「高貴な人に限られたが、時代が下がるにつれて」「敬意を失って目下の者」に用いる、「だち」とも、とある。「虫めづる姫君」の使う男童の説明として必要にして十分にふさわしいものといえる。

四、「いなか(いなかた)」という虫は何か

「いなかち」の語の前半にあたる虫の名前は何か。「ち」を「達」という接尾語とするならば、残った語の成文は「いなか」と可能性としての「いなかた」である。「いなか」は「おなか(田舎)」ではない。恐らく「いないね稲」系の言葉である。「虫めづる姫君」の「いなかち」は類例のない孤語である。しかし「いなかた」という語になると、複数例あり、歌にも詠まれている。『日本国語大辞典』の「いなかた」の語を引く。

いなかた〔名〕語義未詳。*小町集「秋の田の仮庵にきゐるいなかたの否とも人はいはまし物を」*経信集「霧はるかど田の上のいなかたのあらはれわたる秋の夕ぐれ」(補注)鳥か虫の名であろうというが不明。一説に稲田の中に害虫な

どを防ぐために立てる稲旗（いなはた）とも、田の中に木を渡して稲を干す稲機（いなはた）ともいう。

例歌にある如く、季節は「秋」、場所は「田」稔る稲、「きゐる・あらはれわたる」は「飛んでくる虫」である。これだけで農業経験者やナチュラリストならば、そして「いなかた」という言葉から、虫の名を同定するならば、「稲」という言葉を頭に持つ「稲子^{いなご}」以外にはない。何故、鳥（雀か）や稲旗や稲機なのか、素直な発想でないと考えられる。

そこで「稲子」の異名を求めてみると、『標準語引き日本方言辞典¹⁰』（小学館）の「稲子」の項目に、和歌山県西牟婁郡の方言例として「いなかた・いなかたかた¹¹」とある。次いで、同社の『日本方言大辞典上巻（全三巻）』に「いなかた・いなかた／いなかたかた」が項目例として載せ「ひいなた¹²」（稲田子）としてあり、「いなた¹³」（稲田子）虫、いな¹⁴」（稲子）の項目には、「（いなかた・いなかたかた）和歌山県西牟婁郡六九〇¹⁵」として載せてある。ちなみに『現代日本方言大辞典』（明治書院）の「いなご（蝗）」の項目には「いなかた」系の語例は記載されていない。

それはともかく、ここでは「いなかた」が「稲の虫」であり、小町・経信の歌に関しては、「稲子」と呼ぶ、あるいはそれに類する虫¹⁶）として、歌の解釈に資して、不明の部分を解釈するには役立てたことになる。

五、「いなかたち」の結論

「いなかた」という「稲子」を意味する語句と「達（たち）」という「人」を示す接尾辞が一体化して「いなかたーたち」となる。結果としては、単純で平凡な語句となった。ただし、「いながまろ」に比べて、「いなかたち」の六語はいかにも長く舌にもつれる感がある。「いなかた」と「いなご」、「たち」と「まろ」が比較され、「いなかたち」という語に収束してゆくという想定は無理ではないと考える。

そして改めて、「虫めづる姫君」の男童としての呼び名は「ケラ男、ヒクサ鷹、イナカ達、イナゴ鷹、雨彦」となる。結果として「稲子」が二回名前を変えて出てきている。逆に考えれば、同じ虫であるから、呼名が違っても連続して書かれているとも考えられる。

また一方では、虫の名前は数限りなくあるのに、よりによって同じ名前にするだろうかという疑いも生まれてくる。

六、「いなご」と「いながまろ」と

様々の注釈を見ると、「いなかたち」は「かなかがち」とする説と「不詳」とする説とあり、私の見解は述べた。不思議なのは「いなが鷹」の注であり、三説に分かれる。山岸氏以下の「ショウリヨウバツタ」説と「イナゴ」説と「ショウリヨウバツタ・イナゴ」併記説である。

「シヨウリヨウバツタ」説

山岸徳平・松尾聰・三谷栄一・塚原鉄雄・稲賀敬二

「イナゴ」説

池田利夫・大槻修

「シヨウリヨウバツタ・イナゴ」併記説
三角洋一

何故に難語とも思われない「いなご麿」に、見解が分かれるの
だろうか。改めて考えてみると、この全ての注は「いなかたち」
を「かなかがち」とするか、「不詳」としている。ということとは、
「いなご麿」の「いなご」は現代の「稲子」をさしていない、あ
るいは、さしていないかもしれない、としているのである。少な
くとも、「イナゴ説」を除いては。

本論の流れから言えば、「稲子」という虫はわかった。それな
らば、現在の「稲子」という種名と「いなご麿」の関係はどうな
るのか。そのまま重なるのか、それとも違う種類なのか、説明せ
よということになる。

『和名類聚抄』には「蝻蟹 いねつきこまろ」「蚱蜢 いなこ
まろ」「蟋蟀 はたはた(はった)」の三種をあげている。『日本
国語大辞典』の「いなごまろ(稲子麿)」の項には、「(稲子)」を
擬人化していった語)イナゴ、バツタ類の古称。特にイナゴをい
う場合が多い」とある。

ところが、新井白石の「東雅」には、

古にイ子ツキコマロといひしものは。即今いふ所のイナゴと
いふ是也。古にイナゴマロといひしものは。即今いふシヨウ
リヨウムシといふ是也。古にハタ／＼といひしものは。今も

またハタ／＼といふ也。

更に『物類称呼』にも

又古いねつきこまろといひしは今云いなご也 また古いなこ
まろといひしは今云はたはた也

近世の考証学の成果によれば、「いねつきこまろ」が「稲子」
であり、「いなごまろ」は「精霊バツタ(俗にキチキチバツタ)
であるという。

そうだとするならば、「虫めづる姫君」の男童の呼び名は「ケ
ラ男、ヒクサ麿、イナゴ達、バツタ麿、雨彦」と呼ばれた可能性
も出てくる。

そこで新たな見解として、「イナカ達(稲子達)、稲子麿(バツ
タ麿)」という説を、私の結論とする。

注

(1) 塚原鉄雄校注『堤中納言物語』新潮日本古典集成(昭五八
新潮社)

(2) 山岸徳平『堤中納言物語全註解』(昭和三七 有精堂)

(3) 藤森朋夫・佐伯梅友『堤中納言物語新釈』(昭和三一 明
治書院)

(4) 注2 三一五頁

(5) 注2 三一三―三一五頁

(6) 今泉忠義訳註『徒然草』角川文庫(平成九 角川書店)

(7) 竹鼻績訳注『今鏡(中)』講談社学術文庫(一九八四年
講談社)

(8) 浅見和彦校注『十訓抄』新編日本古典文学全集(一九九七

年 小学館)

- (9) 中田祝夫編『倭名類聚抄』勉誠社文庫二三(昭和五三 勉誠社)

- (10) 佐藤亮一監修『標準語引き 日本方言辞典』(二〇〇四年 小学館)

- (11) 注10 一五七頁

- (12) 『日本方言大辞典(全三卷揃) 上巻』編著小学館国語辞典編集部 一九八九年 小学館 二〇四頁

- (13) 注1および『堤中納言物語』角川文庫(昭和三八 角川書店)

- (14) 松尾聰・寺本直彦『落窪物語 堤中納言物語』岩波日本古典文学大系13(昭和三一 岩波書店)

- (15) 三谷栄一・今井源衛『堤中納言物語 とりかへばや物語』鑑賞日本古典文学12(昭五一 角川書店)

- (16) 注1

- (17) 稻賀敬二校注『落窪物語 堤中納言物語』新編日本古典文学全集17(二〇〇〇年 小学館)

- (18) 池田利夫『現代語訳対照 堤中納言物語』旺文社文庫(一九七九年 旺文社)

- (19) 大槻修校注『堤中納言物語 とりかへばや物語』岩波新日本文学大系26(一九九五年 岩波書店)

- (20) 三角洋一『堤中納言物語』講談社学術文庫(一九八一年 講談社)

- (21) 注9 二二二頁

- (22) 市島謙吉校訂『新井白石全集 第四卷「東雅」』(明治三

九)三八七頁

- (23) 東條操校訂『物類称呼』岩波文庫 (一九四一年 岩波書店) 七〇頁

(さくらいやすひさ 元神奈川県立高等学校長)